

第十七回 大生院感動講座 近藤篤山と大生院

平成十四年九月一日 十八時～二十一時

於正法寺本堂

第一部 近藤篤山と大生院

■挨拶

感動講座会長 高橋建次

■尺八演奏 有志

■小松藩と大生院

大生院公民館長 高橋 恵

■近藤篤山と正法寺

正法寺住職 大西大寛

■「伊予聖人」近藤篤山

元新居浜西高校々長 三木 忠

第二部 ギターコンサート 真柄 征佑

近藤篤山と大生院



はじめに

伊予聖人 近藤篤山先生と

大生院公民館の感動講座について

伊予聖人と称えられた近藤篤山先生は、土居町に生まれました。大阪、江戸で学び立派な学者として高く評価をされていました。川の江で塾を開き、小松藩の藩校 養正館の先生として、素晴らしい成績をあげた優れた教育者です。小松藩の先生として迎えられた頃には年老いた両親が大生院に住んでいました。小松に自分の屋敷を持っていなかった先生は、毎月十日間の三年両親の住んでいる大生院まで帰って親孝行をしたと言われます。感動講座ではこの親孝行の為に通った道を「篤山の孝道を訪ねて」と題して事業を行っていただきます。

以下は平成十四年九月一日 「近藤篤山と大生院」の講演会の内容です。

尚、高橋 恵 公民館長の講演内容は録音機器の不調

により撮れていませんでしたので当日会場にて配布されたレジュメの内容を掲載させていただきます。

■小松藩と大生院 大生院公民館長 高橋 恵

関が原の合戦の功績により西条の一柳直盛に六万八千石が与えられる。その三男 直頼に一万石を与え小松藩が始まる。一六三六年初代 直頼公より八代 頼紹公まで続く。その屋敷付近に低い松が群生していたことから、小松と呼ばれるようになった。小さな藩で松山藩、西条藩、天領に挟まれるような形で藩があった。人口も少なく、城ではなく陣屋が存在していた。東部の萩生、大生院、半田、上島山を飛び藩と定めた。

大生院の沿革

豊臣氏の時代は長曾我部の所領であった。天正十三年四国征伐後に小早川隆景に移った。天正十五年福島正則に属し、慶長五年に加藤嘉明に、寛永四年に蒲生忠則に移る。寛永十年に一柳家へ移る。明治時代に西

条ぶんと新居浜ぶんに分かれる。

鮭川の分水について

天正の乱以降に上島山村と半田村へと分水が行われた。承応年間（一六五二～一六五五）に時刻による分水から分岐による分水に変わったと言われている。

井堰の保守管理

小松藩普請奉行資材の提供をする。上島山村、大生院村、半田村が使役を提供した。各村の負担率は現在も継続されている。

■近藤篤山と正法寺

正法寺住職

大西大寛

こんばんは。今日各地からお寺においで下さりありがとうございます。先程の尺八の音色に耳を傾けておりますと、当山の八代目の住職 榮澄上人と申しまして、ちょうど文化、文政から天保にかけて住職をしていた方ですが、その方と篤山さんが親しくお話をされていた詩が浮かんでまいります。その漢詩と云うのは、

冬夜遊正法寺

天寒諸品静 寺晚对空山 鐘歇雲松外 燭明窓竹間

杯盤忘世間 談話叩玄関 名利百年事 何如一夜閑

というものです。「燭明は窓竹の間」というのは、篤山さんと榮澄さんが二人で、今は客殿になっておりますが、その当時は本堂であったところですよ。その一間に障子があり、天保時代のまま残っているのですが、おそらく二人で夜が更けるまで談に興じ、いろいろ話

をされておられたようです。

「杯盤に世間を忘れる」、粗末な食事ではあるが二人で食べて、世間の俗事を忘れ、佛法の話がされておられたようです。そして、「名利百年の事」と言っておりますから利益とか名声とかいうものは長くても百年の事ではないかといつて、人間としての生き方を二人でいろいろ話しておられたようです。その様子が尺八を聞きながらうかんできてまいりました。



さて限られた時間ですので、当時の住職と篤山さんのことについて話させてもらいます。篤山さんは伊予聖人といわれていますように大変立派な方です。小さいときから親孝行をされ、最終的には学問よりも孝行を取られた人です。生き方自体が聖人であつたひとです。

正法寺の僧侶と篤山先生

左下図 徳見堂

その方と先ほどの榮澄さんというお坊さんは、檀家の方から名前とは別に徳のある僧侶という意味で「徳僧」と呼ばれていた方です。この方が天保元年ごろ徳見堂に六十歳くらいで隠居されました。その後、徳見堂は明治初期、寺子屋として大生院小学校のものになりました。また雨乞いが

大変上手な方であつたところで小松藩の七ヶ寺中の一ヶ寺として下島山郡と上島山郡を統括して雨乞いをしていた寺でありました。今、雨乞いと言うと皆様大変非科学的と思われるかもしれませんが、江戸時代、雨がふらないことは今以上に深刻



な問題です。そういったことを神仏に祈ることによって雨を降らせ解決してもらう法に長けた方です。またお弟子さんとして榮教―榮鳳―榮尊といった方々や他たくさんのお僧侶を育成されました。

さて今度は、榮澄さんの末のお弟子さんで、榮尊さんのことを少し話します。彼は弟子の中では一番長く三十五年程この寺の住職をされました。天保元年（文政二年）まで住職でした。その方は、篤山さんというより、次男の實山と号した、真助さんとお付き合いがありました。余談ですが、篤山さんは高太郎（たかたろう）というのですけれどもお寺に手紙をおくるときは相手がお坊さんだから本名を名乗るのを憚って、この名でくることもあったようです。榮尊さんは、実際は榮澄さんが六十歳のころのお弟子さんで、その兄弟子、榮教さんは三年間住職をつとめたのち西条の宝蓮寺に行かれました。そのあとの榮鳳さんは住職になって一、二年後病気で亡くなってしまいます。ですから榮尊さんは、かなり若く住職になられたのではないかと思えます。その当時の過去帳や書類を整理しているうち同じ住職としてどのような気持ちで住職をされておられたのか興味をもちまして十年前にいろいろと調べまし

て資料をつくりました。皆様の手元にあるのはその一部です。どうか後でみていただきたいと思えます。機会があれば、当時のご住職の様子をまた話したいと思えます。

最後に、法句経というお経に「花の香りは風に流れて広がっていくが、よき人の香りは風にさからって広がっていく」という言葉があります。篤山先生の歩んでこられた足跡と、徳行は時代こえて学ぶべきものがたくさんあると思います。正法寺には現在火災などで明治時代や大正時代の書簡などはほとんど残っておりませんが、天保時代、篤山さんのころの書類はなぜかダンボール箱に何杯もできました。このことは、あながち偶然ではなく私達を含め、大勢の方に篤山さんの説かれた孝行や慎独といった教えが今の世にこそ必要になり、平成になって襖の下ばりや、壁紙等から現れたのではないかと思ったりしております。あまりいいお話にはなりませんでしたがこれで私のお話を終わらせてもらいます。

■「伊予聖人」 近藤篤山

元新居浜西高校長 三木 忠

三木と申します。私は土居町の中村というところに住んでおります。私もお寺にご縁がありまして土居の見寿院（けんじゅいん）という御室派のお寺でその総代をさせて頂いておられます。聞くところによると正法寺さんも仁和寺を本山とされていると聞いています。さてこちらのお寺との関係は私が新居浜西高校の校長をしているとき、高校の印刷物を岡田弘文堂という印刷屋さんにお願しておりました。そんな折、今から十三、四年前弘文堂さんからこちらのお寺で篤山さんの書簡が襖の下貼りから出てきたので調べてくれたのかということでお寺の書簡を調べさせてもらいました。篤山さんの次男の實山（きざん）先生が榮尊さんに漢文を教えられていて、ここにもレッスンにいられたお文章を作ったたら、實山先生を通じて篤山先生に添削をしてもらっていたようです。これを読ませてもらいました。

大生院と正法寺

まず篤山先生のことを話す前に大生院のことをお話しさせていただきます。大生院の名は、先程お話がありましたように石鉄山 往生院 正法寺から名がとられています。ふつう村々ができるというのは、室町時代や戦国時代なのですが、此のお寺は奈良時代に上仙さんという方によって創建されました。この方は石鎚山で修行を積んだお坊さんで神通力をもっていたといわれております。しかしお坊さんだけではお寺の運営できませんのでその当時この地域を開発した豪族の秦氏が自分の寺の住職として名高い上仙師を招いたと寺伝には記されています。秦さんという苗字はこの地域や西条にかけて多くおられます。だいたい中国からの帰化人の系統だと言われています。それ以外に正法寺はこの地域の中心であり非常に栄えていたようです。秀吉の四国征伐のときに焼



失しますがそれまでは前の田のあたりに、七堂伽藍を有する大寺院であつたようです。そういうことから、往生院正法寺がある村ということで、往生院という名がついたようです。しかし「往生」と言う名は本来極楽に行くという意味で良いことなのですが、現在使っているように亡くなるという意味合いが強くなり、「大」という字に改まりました。本来は極楽往生を願う意味で秦氏が建てたと思われまます。

篤山先生一家

次に小松藩の資料を見て見ますと、村の広さ人口石高などが出てまいります。明治三十年に大生院は新居浜に編入されましたが、その一部、西の三十五%が民衆の希望もあり、西条に合併します。市ノ川にあつたアンチモニーの鉱石などは、小松藩の記録をみますと非常に大切なものでした。輝安鉱はかつて茶筒ですとか印刷に使う合金として用いられておりました。篤山先生についてですが、私が住んでいた所が、小林村の隣でして、篤山先生の家は庄屋の次のうちになります。庄屋は西山家と言ひ、その次に高橋と中川という組頭がいました。その高橋という家が先生の家にあ

ります。本姓は高橋と言ひお父さんは高橋甚内と言ひます。どうして近藤かというとその前のおじいさんが、天満村の近藤から養子にきておりました。小林村は小さく貧しい村で、川がなく日照りになると水がなくなり、大雨になると崩れたりしていました。中村や藤原は天領であつたので優先的に水が引かれましたが小林村は中々引けないため、溜め池が多く作られました。天明の飢饉の折、先生の一家は、貧しくなり家を出なければならなくなりました。先生が六歳のころです。お母さんは川之江の半

田の矢野と言う庄屋からきており、その時、実家に呼び戻されることになりました。篤山先生と弟（三品容齋、後に西条藩の儒官）を残し、家に帰られました。お母さんは、後に東予市の黒川家に再婚されました。このように小さな頃、非常に苦勞をされました。そしてお父



んは、先生達を連れて別子銅山の小役人として働きに行くこととなります。当時村を出る時、用いられた身分証の控えが土居の見寿院(高橋家の菩提寺)に残っております。庄屋の西山家と見寿院が連名で許可書を高橋甚内の名でだしております。そして中萩の飯尾家に養子という肩書きで行かせます。姓も高橋で行くと家に傷がつくので中萩にある大村という姓でその養子という形でこられます。先生は幼少のとき、「大八」のちに「太郎」もう少し先に「高太郎」になり、高橋の姓を除き近藤の姓を名乗り別子銅山へ中萩の飯尾家を通じ大村の姓で山へいかれました。そこで小さい頃を過ごされました。ところが別子銅山は当時全国から流れる者が多く来ていて、喧嘩はよくあるし、酒を飲んで暴れたりするものがありました。泥棒もよくあるし、山崩れも起きもするわけで、先生のお父さんは真面目な方で、こんなところでは教育はできないと思ひ山を下る決心をされます。村を出るときに色々なところからたくさん借金をするのですが、庄屋の西山家が入つて後始末をして出られました。ですから先生は、初めは別子銅山の役人に読み書きをならつたり、別子山のお寺で習つたりしていたわけ

大阪で勉強、開塾

その後、子供二人で京都に行き医者になろうと決心されて行かれるわけですが、京都は大火事だったもので途中の大阪でとどまり、川之江出身の尾藤次洲先生が塾を開いているのを聞き、そこにいかれました。非常に貧しく一日一食の生活をされます。それもおからと芋だけといった内容で勉強されたわけ

です。そのうち篤山先生の友人はやせ細っている姿をみて死んでしまふのではないかと心配されたのですが、先生は「勉強で死ぬことはない、心配しないでくれ」と言われたそうです。今の生徒とだいぶ違いますね。一日一食でいつも着ているものは同じ、そういう苦しい中で勉強をされました。その頃、尾藤二洲先生も貧しかったのですが、篤山先生の学友があまりに心配しているの下宿をしていたらお金もかかるということで、兄弟をすまわせず元で勉強させました。ところが二洲先生は入門して二年ほどで幕府の昌平黌(昌平坂学問所)へ招かれて行くことになってしまいます。そのため、篤山先生達は、困り別子村へ戻ってくるようになりました。そこで

父さんと相談しましたが、別子山に戻っても、どうにもならないのでまた大阪に行き塾をされることになりました。塾をひらかれて三年目に二洲先生から、江戸に出てこいと何度も声がかかるのですが行くお金もないということでした。「せめて片道のお金だけでも都立できないのか」という内容の手紙もあります。二洲先生は自分のところに来たら何とでもしてやるという様子で、小松町の近藤家で見せてもらいましたが心を打たれました。そういうことで篤山先生は、別子のお父さんのところに戻りました。その当時義理のお母さんもきていました。そこまで二洲先生が言ってくたさるのとお金もない為、篤山先生のみ昌平覺に行くことになりました。当時、昌平覺は旗本直参の子弟か、諸藩の儒者の息子が入学するところでした。篤山先生などは入学資格もないし、お金もないのですが二洲先生は自分の家の書生として昌平覺に入れるわけです。必要最小限の期間、卒業まで普通三年かかるのですが、二年九ヶ月で親孝行をしなくてはいけないということで郷里に戻られました。しかし別子山にいても仕方がないので二洲先生の出身地の川之江で塾を開かれました。川之江で塾を開き十八人の弟子を熱心に教育されまし

た。そのことを小松の竹鼻生脩という方が小松の殿様の頼親公に川之江に優秀で熱心な先生がおられるので、小松で養生館(学問所)を作ろうとしている所だから先生としてお迎えしましょうと薦められたことで、小松からお招きがかりました。これが享和二年(一八〇二年)のことです。しかし川之江の弟子達は非常に悲しんだので、放っておくわけにもいかず、

大生院へ

下図 小松図書館蔵 篤山先生父を迎える図

この地(大生院)にや
つてこられました。は
つきりわかりませんが
どうも今の小学校のあ
たりだそうです。その
時お父さんは別子山で
苦勞しております。寒
いうえに家も板張りで
粗末でした。篤山先生
は人一倍親孝行でした



ので、なんとか自分のくらしができるようになったというところ、小松藩での仕事が決まったということで、お父さん呼びます。当時二洲先生との手紙で小松藩へ仕えることに対して、「二万石程度の藩なので川之江で塾を開いているのと変わらないのではないかとよく考えなさい」といった内容の手紙もでてきます。しかし小松のお殿様と竹鼻先生は熱心に「賓師(ひんし)の礼」をもって迎えるといつて頼んでこられました。つまり殿様の先生としてむかえるからということですが、給料はたくさん出せないが米五十俵の現物支給でということになりました。当時の小松藩は困窮していて、他の藩士だと石高はそれなりに貰っていたが、実際は三分の一しか貰っていない状態です。篤山先生の五十俵というのはあまりいい給料とはいえませんが小松藩としては精一杯の給料でした。喜多川という家老が四百石でして当時、一柳の分家と喜多川の二件しか家はなく、四百石でも実際は三分の一でして、篤山先生より多くはなりませんが篤山先生の五十俵というのは、侍でも上の侍の給料に相当しました。その時期に川之江の弟子達は篤山先生が行かれるのを悲しみ惜別の表をだしています。これは小松の近藤家にあります。そ

れで小松と川之江の両方とも見る事となり、その中間にある大生院に住みました。孝行するため、お父さん呼び寄せここから川之江に教えにも行くし、小松へも賓師の礼ということで七人だての籠が迎えにきました。四人は担ぎ手になり、残り一本を持ったり、雨具を持ったりの者が前に一人付き大生院まで送り迎えをしました。そういう待遇で小松と川之江をレッスンしていました。お父さんが大生院にきたのは一八〇二年(享和二年)十二月でして、本来にいたのは享和三年から文化三年ですからあしかけ四年ほどの短い期間でした。その間大生院におられました。

その時に他の人達と先生は話が中々合わないの、ここのお坊さんと話をしていたのが先程の「冬夜遊正法寺」というもので、「遊」というのは本当に遊ぶという意ではなく話をすることです。あるいはその漢詩があるように、川之江のほうの話は決まっただけどまだ正式に役職に就いていないとき、ここを通過して別子山に行っていた頃、渦井川で足を洗った詩がでています。それは寛政九年、丁度ここから戻ってきて、川之江で塾を開く時です。次にでている正法寺でお坊さんと語り明かした漢詩がありますが、これはおそら

く文化元年か、文化二年のころの漢詩です。このお寺は格式が高く古いお寺で当時のお坊さんも徳も高い方でしたので篤山先生も何回かこられてお話をされたいたのでしょね。篤山先生は儒学ですので仏教の方、真言宗のお話はお坊さんにお話をきかれたのでしょね。ですから

漢詩の内容

「このお寺のあるところ夜は山と空に対し非常に静かでひっそりとした場所である。もう晩になってお寺の鐘は鳴らなくなるが、窓から見える光は、竹の影を通して見える。そこで寺にあがると杯と御馳走を盛ったお皿で歓待してもらった。そこで仏門の教えを乞い、夜遅くまで語り明かしました。世の中では名声と利益といったものは、いくら長生きをしたとしても精々百年のことではないか。今晚このようにのどかに話すということは、これはなんともいえないことであつてこういう貴重な時間はめつたに得られないもののようにしてこのような機会をまた得ようか」という歌をつくられていますね。篤山先生は八十一才で亡くなりました。当時としてはかなりの長生きです。もうひとつ正月の

ころの、川之江の人が持つている書があります。「好みて住す」「白雲紅樹の裏」ここは住み心地がよい。白雲というのはこの山の後ろから銅山越えの雲をいうのでしょね。紅樹というのは、冬に赤いと言えは梅か椿が考えられます。私は椿と解したい。というのはこの山にはたくさん椿がありますから。正法寺のことではしょね。

下図 薬師堂裏の藪椿樹齡推定二百年

そして「君とともに同じく唱す」これはお父さんのことでしょう。長い間苦労をかけたお父さんに孝行ができるし小松藩への就職も決まつたし、このときは既に讃岐からお嫁さんも、もらつていたので、今大変うれいと言ふ事でしょう。



次の書はそこにかかっているものでして、字からい

うとそんなに年をとられてからのものではないと思います。十四字あつて七言の対句になっています。二、三、に切つて読んでみますと、「微吟」「緩節」「還帰晚」「二任」「春風」「拂面吹」春の詩といふのはすべかわかると思います。しかも春の宵、ここにいたときか、小松から訪ねてきたときかわかりませんが、ゆるやかな漢詩の節まわしを自分で吟じたら、丁度カラオケで歌うように小声でうたわれたのでしょね。晩帰りながらうたつた。そうすると春風が自分に気持ちよくあたることだと、といった詩です。お父さんは、先生が小松の儒官になられてからも生きておられました。篤山先生の孝行の話がでてきます。篤山嶽書とあります。篤山と名乗るのは、相手が目下になるときに使われています。同僚もしくは上の方には高太郎でいきます。篤山先生の本当の名は春嶽(しゅんすう)と言います。近藤家は代々「春」がつけます。「春」がついていないのは謙遜して嶽書とだけ記しています。七十五歳のときの字です。

篤山先生の教え

最後に篤山先生の教えについてお話しします。男子向けには「三戒」というものがあります。

一つは「立志」人間は、志をたてなくてはならない(自分がやるべきこと)かつそれは高いものでなくてはならない(高天ハカルベカラズ)天にまで届く位の、そうしないと進歩がない。私が川之江で校長をしているときも野球なら甲子園に行くと、大学なら一番いいところに行けと言いつつ行っていました。そう思っていないければ甲子園などは行けませんし、思っていたとしても行けるものではありません。行けたら行くなどといった考えではまず無理です。だから志をしつかり持つということを一歩目に言っているわけです。

二番目には「己求(きゆうき)」これは人のせいにはしない、ということ。うまく事が運ばなかった時は、自分のどこが足りなかったのかということを反省しなさいということ。先生が悪い、友達が悪い、世間が悪い、親が生んだのが悪いとか言つたのでは進歩がありません。これは己に求めるといふことです。

最後は「慎独」これは人間一人でいるときに最も真面目でなければいけないことです。例えばお巡りさんが見ていない時だけ、交通違反しないとか、あるいはスーパーでおばさんが見ていないから万引きしようとか、先生がみていないからタバコを吸ってみようかということ。どうしてかという先生や人は、見ていなくても己の良心はそれを見ているではないか。天も見ていられないか。神様も仏様も全部肺から脾臓の中まで全とお見通しだ。だからだれも見えないということはない。独りでいるときも真面目でなければならぬ。

「四如」教え

下図 小松図書館蔵 四如の教え

また女の人に対しては「四如」の教えというのがあります。これは女性の為の四つの心得です。例をあげて説明されています。

「上二仕ウルハ布団ヲ敷クガ如クフツコリト」上とい



「下ヲ扱ウハ火ヲ炊ク如クスゴサズ、フスベズ」下の者を扱うときは火を焚くときのように。「スゴサズ」というのはかまどにたくさん焚き物を入れること。(たぐさん仕事を言いつけることのとたとえ)「フスベズ」というのは、薪が多いとくすべてしまうという意味で、それと同時に、いい年をしてこんなこともできないのか、と叱つたりしてはいけないという意味で、くすべずというこ

とです。最後は「身ノ働キハ水ヲ扱ウゴトク惜シゲナクサツパリトシテ」女の人は腰が重くてはいけない。水を扱う如く率先していいそと、自分の体を使うときには行ないない。

右「四如の教えは婦女子のわざの常なれば折にふれ、かえりみ戒しむべきことになん(竹馬主人)」と書かれています。先生は年をとられてから、篤という字を分解して「竹」「馬」に分けられました。「竹」を先生は節があり、節操あると言って好まれました。

そういうことで男性は「三戒」、女性は「四如の教え」を説かれました。今でも先生の説かれたことは通用いたします。また「上二使ウルハ」というのは封建的とか現在では言われそうですが、当時、女性は就職などしていなかっただからです、年寄りを大事にするという事です。旦那さんを大事にするという事です。これは今もいっしょであります。

今日は時間がありませんので充分お話ができませんでしたが、こういう篤山先生ゆかりの地、土居の私のいる村と小松町と図書館のあたり、そしてこの小松藩

でありました大生院、特に正法寺を中心とし、新居浜では一番いい環境だと思えます。一番遅れていると言いますが、町中よりずっといいと思えます。「白雲紅樹」です、創造センターはありますし、科学博物館もあるし、お寺もありますし、こういうところは新居浜にはあまりありませんからここを中心に教育文化の町として発展してほしいと思えます。ご清聴ありがとうございました。

※転載をなさる場合は、ご連絡ください 音声反訳 大西寛朗